

第 20 号  
1972.6

# 書評

淀んだ海

■ 書 評

- 4 犯罪方程式の解明 福岡信孝  
— 人民を忘れたカナリアたち (永山則夫著) —
- 12 人間の真情を歪める官治と自治の  
牽引的關係 石尾芳久  
— 沖繩の犯科帳 (比嘉春潮・崎浜秀明編訳) —
- 15 表現しきれない「悪」 小川富雄  
— オキナワの少年 (東峰夫著) —
- 17 帰ろうよ、うちなあんちゅ 末吉栄三  
— オキナワの少年 (東峰夫著) —
- 19 白夜の旅人 大坪信善  
— 五木寛之の世界 —

■ わたしの研究ノートから

- 22 石舞台古墳の発掘 網干善教  
— 古代史の謎に挑む (Ⅱ) —
- 24 日中文化関係史の一面 (Ⅱ) 増田渉
- 26 洋魂和才のこと (Ⅰ) 市原亮平  
— R・P・ドーアとの交渉 —

2 ■ 巻頭言 末吉栄三

28 ■ 編集後記

編集・発行  
関西大学生協同組合  
組 織 部  
「書評」編集委員会

吹田市千里山東3-10-1  
TEL 388-1121  
内 線 776

書籍購入グループを創設し  
一括共同購入を推進しよう  
書籍の生協一元化をかちとろう

題字は網干善教文学部助教授  
カット写真は「抵抗の画家」(造形社刊)より  
ハインリッヒ・チルレの作品

1. 鹿山正。おそらく、「多くの日本人」としては、ナジミのない名前だろう。しかし今、おそらく新聞の読める年頃以上の沖繩人ならこの名前を知らぬ者ははいない。一九四五年のいわゆる「沖繩戦」において、多くの沖繩人が「友軍」であるはずの日本軍（人）に虐殺された。「集団自決」させられた人々を含めると、その数は千人を下らないという。生き残った人達は口々に言う。「私達が最も怖れたのは、米軍ではなく友軍だった。」と。その虐殺者の一人、当時久米島の守備隊長が、徳島市にいた。鹿山正。多くの子供や乳幼児さえ含む二十人の住民を日本刀や銃剣で惨殺。（しかもうち十人は八月十五日以後に殺されている。）谷川昇さん一家は「朝鮮人」という理由だけで五人の子供達を含む全員（七人）が日本刀で切り殺された。その鹿山がヌクヌクと生きていた。（しかも、この男は十五、六才の島の女性を「現地妻」にして、山に逃げかくれ、最後は米軍に無傷で降服してきたのである。）彼は、新聞記者のインタビューで、沖繩（人）差別をモロに出してこう答えた。「（集団虐殺は）当然の処罰であり、間違いがあつたとは思っていない。」「島民の日本に対する忠誠心をゆるぎないものにする為」にやつた事で「ワシは悪い事をしたとは考えていない。」「良心の呵責もない。」さらにこうまで言い切つた。「日本軍人として当然の事をやつたのであり、軍人としての誇りを持つている。」と。彼、鹿山にとって、沖繩人を虐殺する行為は「日本軍人として当然のこと」であり「誇り」でもある。「間違い」どころじゃない「悪い」ことでもない。だからこそ一家を皆殺しにしたあげく、家ぐるみ焼打ちまでした事を「あれは家と一緒に火葬してやつた。」と胸を張つて言えるのだ。この沖繩人を人間とも思っていない発言は、当然、沖繩全土に怒りのうずを巻きおこした。ところが彼は再び新聞紙上ではつきりとこう言つたのだ。「（沖繩人が）なぜ憤慨しているのかわからない。ワシは日本軍人として絶対謝罪しない。」さらにイミジクもこうつけ加えている。「（虐殺は）日本の国土防衛の点からやつた。」と。この男にとっては「日本の国土防衛」の為には沖繩人などいつ、どのように殺してもよい。「当然」の行為であり、それを沖繩の人々が怒る事さえ理解できない事なのである。彼（等）にとつて「久米島は「植民地」にすぎないのだから。この虐殺者自身が沖繩（人）に對してヒトカケラの罪の意識も持っていないという事。この男は「特別に異常な日本人」なのだろうか？ どうもそうは思えない。むしろ、多くの日本人の精神構造はこの鹿山のすぐそばに位置しているように思える。四月四日、この鹿山がTVのニュースショーで被

# 怨念——沖繩

害者の遺族等と対決し、ここでも「当然の事」と発言、沖繩側から「あんたを八つ裂にしたい」と激しく糾弾された。しかし重要なのはその後である。放映の後、キー局のTBSに百三十本もの視聴者の声が届いたが、そのほとんどは「戦争の犠牲者は沖繩だけではな。沖繩を甘やかすな。」というようなものだったと聞く。「沖繩を甘やかすな」とは、反軍、反基地闘争に恐怖した日本政府の発言でもあった。こういうやつら（日本人）が日米合同（いや、先日の米軍発表による）、沖繩の米軍基地は「国連軍」も今後は使用するという）のアジア侵略基地の「機能維持」「民生安定」の為にそれを脅かす沖繩人を撃ち殺しに軍隊をさし向けている。

2. 七〇年七月八日、東京タワーでアメリカ人宣教師を人質とし、「日本人よ沖繩の事に口を出すな。」「アメリカは沖繩から出ていけ。」と叫び、日米両国の沖繩支配・差別を糾弾して逮捕され、裁判闘争を続けていた富村順一さんに、東京地裁は異例のスピード判決で、五月一九日、求刑通り懲役二年の実刑を言い渡した。一七、八年にも及ぶ天皇と日本人への多様な形での告発を、裁判所・警察と右翼に悉く阻害され、最後の手段としてとった東京タワーでの行動を、裁判所・警察と新聞はその意味の重大さ故に故意に歪曲し、「精神異常者」の事件として闇に葬りさろうとした。事件当時、富村さんはその表裏に「天皇は第二次大戦で三百万人を犠牲にした責任をとれ。」「沖繩の女性みたいに正田美智子も売春婦になり沖繩人民のためにつくせ。それがせめてもの人民への償いである。」と書きこんだハイネックシャツを着ていたが、警察はこの告発の正当さ・重大さ故にこのハイネックを隠滅した。裁判官が判決文で「一般予防の見地からきびしい刑をもって臨む」と発言した中にも明らかにこの告発の正当な意味がひとびとに伝わる事への恐怖がみえて

いる。

「天皇をはじめとする日本の悪党達は、死刑でも首をしめ殺しては不適当です。日本軍に沖繩人や朝鮮人がされた事と同じ様に殺すべきです。」「その時に死刑の執行人はぜひこの私にお願い致します。」「戦時中、多くの朝鮮の女性達が看護婦として沖繩にきてむりやり売春婦にされたのを私は目撃してきました。故に天皇の娘である島津貴子や皇太子の妻美智子も皇后も天皇や皇太子の目の前で米軍に強姦させたいと思っています。」この富村さんの公判陳述にこめられた怨念を理解しえぬ者に「沖繩」を語る資格はない。

（末吉栄三）



恋の担当

永山則夫著

「人民を忘れたカナリアたち」

# 犯罪方程式の解明

福岡信孝

はじめに

本書「人民をわすれたカナリアたち」は、永山則夫にとっては二冊目の著書です。一冊目は、一九七一年一月、井上光

暗黒集の季刊雑誌「辺境」三号に、「永山則夫」獄中ノート」と題して、抜萃されて掲載された後、一冊にまとめられて出版された「無知の涙」です。（合同出版社刊）その意味で二冊目の獄中ノ

トであるこの「人民をわすれたカナリアたち」は、「無知の涙」の続編になるのですが、しかし、私はこの二冊目の著書を敢えて前著の続編として捉えたくないのです。その理由は、前著「無知の涙」

は、永山則夫自身の自己の無知さというものの有する意味の自覚であり、無知を生み出し、必然的産物として送り出している社会への即事的な憤りの表現としてまた、新たな世界観の認識への思索過程として、未消化ではあれ、あの爆発的な文章化作業があったと考えているからです。つまり、「無知の涙」を彼が書いていた時は、彼自身が自己の無知を悟る過程であったのに対して、本書「人民をわ

「すれたカナリアたち」は無知を悟った後の思考過程であり、文章化されたものであるからです。ということは、この二冊目の著書は、永山則夫が自己の存在を確認した上で出発しているということですから、ここでいう自己の存在とは、永山則夫の言葉をかりれば、「自覚したルンペン・ロレタリア」の意味です。

以上のように認識した上でないと、本書の有している意味は正しく捉え切れないので、私はには思われず。何故なら、ルンペンたる永山則夫が、同じくルンペン層に属する人間を何の意味もなく殺したという事実、この事実を事実として認識することの苦しみの過程で、その苦しみの根源を探ろうとする道程が、永山則夫の居直りとも思われる文章化作業であり、この作業の方向が、自らの存在の確認の後の自己存在の止揚への道を模索するものであると考えられるからです。

### (一) 薔薇をかくして

本書は、(一) 薔薇をかくして (二) 核の引金に黒い指を (三) 出口のない入口、入口のない出口 (四) ハイエナを見たりの四章に分かれています。これは別に分ける必然性故に分けられてはいるのではなく、純然たる編集上の都合で分けられ

ているにすぎません。内容は申すまでもなく、永山則夫の獄中に於ける彼自身の覚醒の記録であり、そして更に、これらは東捕大での彼の学習の成果です。永山則夫の言葉をかりれば、「プロレタリアートから無知な犯罪者をブルジョア犯罪者から解放するため」の思考過程の記録です。

「薔薇をかくして」の中での印象的なものは、一番最初の体験談です。これは永山則夫が川崎で人足をやっていた時のことで、朝鮮人の部落で朝鮮人に使われたことを、民族の問題と差別の問題として、新たに階級的視点からとらえ直しているものです。当時の彼は朝鮮人にコキ使われたということ、ただそれだけで無性に胸が立ち、朝鮮人に憎悪と敵意を抱いていた。ところがふと振り返って、何が故に朝鮮人に使われたら立つのかを内省してみると、腹の立つ理由は唯一の根拠もないもので、日本人が朝鮮人に使われたというだけで矮小な優越感が傷つけられたということに他ならなかった。ところが、覚醒した今、改めて入管問題に見られる在日アジア人民への不当な非人間的差別と抑圧の問題を考えてみると、決して偶然に行われているのではなく、日本帝国主義のアジア侵略という歴史の経過を抜きにしては何も考えられないことに気がついたのであります。そして、

その過程で、永山則夫は自己の朝鮮人に對する認識の在り方の検討を余蘊なくされ、自分の認識が何が故にこのように誤って形成されたのかを考えざるをえなくなつたのです。

同じようにこの日本ブルジョワ社会で不当に差別され、抑圧され、擄取されているのは下層プロレタリアートと在日朝鮮人もであり、この両者が資本主義生産様式のもつて底辺を構成し、その経済体制を支えており、このもつとも差別され抑圧され、擄取されている者同志が、実はお互いに力を合せて団結するのではなく差別しあっている、否、正確には支配者の矮小なデマゴギーによって差別させられている事実だ、彼は気が付き、誤つた認識を与えることによって、同じ階級、階級に属する人々を互に憎みあわせ差別させることこそが、この社会を支配し管理している者の本性であることを知つたのです。そして更に、永山則夫はブルジョワジーは自己の支配の論理を貫徹するためには、いかなる非人間的なことをも敢て行い、総ゆるデマゴギーを意識的に造りあげ、流布し、そして、それらを世論として、あるいは国民感情としてつくりあげ、自己の支配の論理の道具として、いることをも認識したのであります。確かに、関東大震災に於ける在日朝鮮人の大量虐殺等を歴史的に考察すれば、永山則

夫の到達した認識は当り前のことであるかも知れません。がしかし、現在今日の日本で在日朝鮮人への差別が公然と行われており、チョーセンジンという言葉がいわゆる蔑称として使われている現実がある以上、この不当な差別する意識を克服することはやはり重要な意味があると思われまふ。それと同時に、永山則夫のような最下層のプロレタリアートのような在日アジア人民、とりわけ在日朝鮮人に対しては優越感を抱いており、差別しているという社会構造の恐ろしさを痛感していることは見逃せないことです。少なくともこのような同じ階級、階級への分断支配の論理が、至る所において、日常的に貫徹されている現実、例えば、私の家は武士の家系だとか、あるいは公家の出だとか、あるいは部落民だという差別意識、あるいは単に理知的とか、あるいは観念的にこの差別意識を克服するのではなく、日常性において克服せねばならなく、その克服とは自らの主体的実践においてはじめて可能であるということも、我々は認識せねばならぬと思う。その意味で、ここにおける永山則夫の自己批判的差別意識の分析は、考えさせられるものがあります。

### (二) 核の引金に黒い指を

この章は主に米のブラック・パンサー

党の指導者の一人、E・クリーパーの自伝的著書「氷の上の魂」についての感想です。いうまでもなく、E・クリーパーは今でこそブラック・パンサー党の指導者で情報相の地位にあるが、クリーパーは永山則夫と同じく最下層の、しかも白人社会における黒人黒人ペンプロレタリア出身であり、育ったのはロスアンゼルス・ゲッターであったのです。もちろん貧困という必然のなせるわざにより、E・クリーパーは「高等無教育」を受けており、全くの無知であり、犯罪者でもあったわけです。おそらく、永山則夫をしてもっともクリーパーを親しいものにさせたのは、E・クリーパーもまた、一九五四年以来、マリファナ所持の罪で州刑務所で服役しはじめてから、実に九年間刑務所で暮し、この刑務所生活の過程で覚醒した人物である点ではないかと思われまふ。何故なら、貧困故に無知となり、無知なる故に犯罪（ブルジョワ市民社会における概念としての犯罪）を犯し、犯罪故に社会的隔離としての刑務所生活。そして、この刑務所生活の中ではじめて自己の存在の意味を認識するという経過が、永山則夫の場合と全く同じであるからです。しかし、E・クリーパーの自己存在の認識としての覚醒への過程は、決してスムーズに行われたのではないのです。（永山則夫の場合も同様のことか

ったと思うが）一般に何処の刑務所でもそうですが、刑務所の中の知識取得は、当局の悪辣きわまらない妨害、阻止行為との闘いの連続であるのです。知識取得とは当局と闘うことであると言ふことは極論になりますが、唯物史観の立場に立って学問をすることはまさしくそうです。例えばE・クリーパーの「氷の上の魂」には次のような例が記述されています。「反文学的なエロ本やリダース・ダイジェスト等は購入することのできて、ノーマン・メイラーの『アメリカの夢』は不許という具合……」、しかし、E・クリーパーはこれらの妨害と弾圧をはねのけ、否、それらをエネルギーとして、九年間の刑務所生活で自分自身なりの革命理論を掌握しました。「アメリカの黒人の状況を『国内植民地主義』と定義し、アメリカにおける黒人の解放のために、資本主義と新植民地主義を暴力的に転覆しなければならぬ」と。そして、クリーパーは仮釈放されると直ちにブラック・パンサー党を組織したので、永山則夫は自分も同じように刑務所で覚醒の過程（勉強）を当局に邪魔されつつ覚醒し、E・クリーパーと同方向を志向しているだけに、より共感を寄せ、近い存在となっているのだと思われまふ。

永山則夫の場合、拘留所（刑務所）に

おいて覚醒のための学習がいかに妨害されたかは具体的にはわかりませんが、日本の刑務所及び拘留所では、一般的に在監者の図書や閲覧許可規程は非常に厳しく、それ故、閲覧可能な図書が極端に制限されているということを知っておく必要があります。それも、図書の閲覧可否のための検閲が、決して監獄法において定めたる内容の検閲ではなく、極めて思想的、政治的な判断による検閲が現実には行われているということ。例えば、ある本や新聞が、一般刑事犯には閲覧許可になっても、全く同じものでありながら政治犯には不許になったりしますし、この逆の場合もあり得ます。そして、もっとコクケイなことには、全裸に近いワード写真の載った週刊誌が閲覧許可になることがあります。要するに、検閲とは名ばかりで、実際は当局の一方的な恣意の判断によって可否が決められているわけです。ですから具体的にいえば、マルクス・レーニン主義関係の本を一般刑事犯が刑務所で閲覧することは至難の業であるということです。何故なら当局は、マルクス・レーニン主義とは煽動の道具であると考えているからです。しかも、日本の刑務所では一般的に服役者が閲覧のために所持できる本は一度に三冊以内であり、それも閲覧期間は一ヶ月以内と

いう厳しい条件です。そして、もっと悪いことには、アメリカ等と違って日本の刑務所内の図書の備えは極めて悪く、おと服役者が勉強できる環境ではないこととです。もっとも、これは刑罰に対する根本的な認識の違いの現われでもあるのですが。というのも、キリスト教文化圏の欧米では、刑罰を与えて服役させるというのを、社会の責任において、社会的な人間に再教育するというように認識されているのに対し、日本の場合は仏教思想の影響で、刑罰とはまさしく刑の罰であり、懲らしめであるのです。このような悪条件に加え、更に刑務所当局は検閲の名において服役者の日記、メモ等へも全て介入し、干渉します。例えば、永山則夫の次のような記述は、当局の検閲干渉のエグゼンサを表わしています。「私も実際、この東拘に来た当初そうであった。ノートに何か書くと思つて直ぐ検閲という名目で取り去られ、その日のうちにノートは返されるが、その検閲されたノートから来る焦燥は何かやり切れないその後、数日そのノートには何も書かない日が続いたことを思い出す。――」

何故、日記にまで当局は干渉するのであるか。いや、そうではなく、どうして服役者が自らの学習のメモや、自己の内部の記録である日記まで、他人に検閲されたり、干渉されたりしなければなら

ないのか？（注 ノートの使用目的以外のことをノートに記してあることを検閲でみつかる、ノートは以後使用禁止され、取り上げられてしまう。） 服役者 犯罪者には、思想、言論、表現の自由はないのであろうか？ 否、断して否である。とすれば何故、当局はこのような干渉を敢てするのであるか。それは明白である。つまりブルジョワ社会における服役者に対する矯正とは、単なる矯正ではなく、服役者の日常性、思想性そのものにまでた入り、管理支配することであるからなのです。だから、ブルジョワジーにとって、犯罪者 反社会的人間を矯正するということは、ブルジョワジーに忠実な人間に改造するということ以外の何物でもないのです。しかし、このことを逆にとらえ直して、それでは犯罪とは何なのかということを考えてみると、犯罪はある一面ではブルジョワ社会に対する反社会的な革命的な行為でありブルジョワ社会打倒の革命性を帯びている行為であるといえます。とすれば、ブルジョワ社会における必然的な産物たる犯罪者（最下層プロレタリアと資本主義生産様式からみだした者）こそが、ブルジョワ社会転覆の原動力となり得る可能性の質を含有しており、それ故、犯罪者が階級的に覚醒した時には、爆発的なエネルギーが噴出するといふことがい



クリスマスかざり

ます。ですから、ある意味で刑務所当局もとても恐れていることはここにあるのであり、それ故に必要以上の思想的な格闘を強いているものと思われます。何故なら、歴史的にみても、ブラジルの革命家カルロス・マリゲラをはじめ、カストロもそうであり、アルジェリア革命においても、刑務所内での革命家の組織化活動が非常に多大な影響を革命に与えているからです。つまり、昔からいわれているように、刑務所は革命的な学校に転化する可能性を本質的に有しているということです。

しかし、先述したように、現実的には

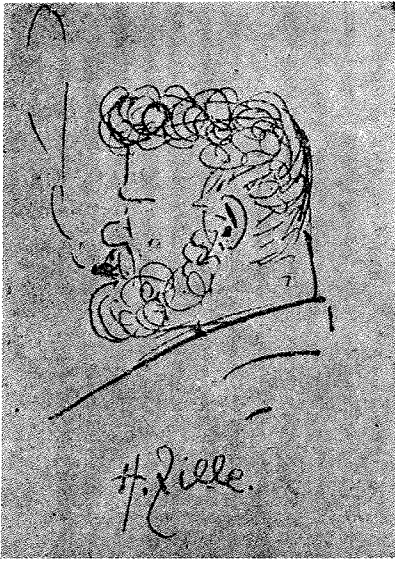
一般犯罪者が刑務所内で階級的に覚醒することは極めて困難であるのです。

この困難な中で、永山則夫が自ら階級的に覚醒したということは、他方に必然性があつたとしても、やはり留意すべきことです。しかし、この資本主義社会の矛盾は、困難があるにもかかわらず、第二、第三の覚醒した永山則夫を生み出しつづけます。その一例として、私が偶然に知り合い、文通を短い期間ながらした、ある少年の手紙が手元にありますので、ここに引出したく思います。この少年はK・I君という十八才の少年です。

K・I君はやはり貧困の中で育ち、すでに中学生の時から市民社会をほみだした

生活を送っています。そして今、彼は階級的に覚醒しつつブルジョワ社会における最初のアカを落すべく奈良少年刑務所に服役しています。彼の文章は、永山則夫の文章がそうであるように、文法的、語法的に大変読みにくいのですが、この点はK・I君が中学を少年院で卒業したということを考慮していただきたく思います。重要なことは、今、彼がいかなる方向に向つていられるかということです。以下は原文通りです。

『前略、始めて便りました。僕はここで（大拘で）階級的人間的に目覚め、憎つくきブルジョワ共をファシスト共を人民と共に打倒すべく、革命勝利を何よりも人民があとに続いて立ち上がる事を信じ、現在、敵当局の非人間的、反革命的弾圧処遇や、再々の恫喝にも負けず勉学に励んでいる半人前の革命家です。僕は中学を少年院で卒業した様な訳でして、悲しい事に学も知識も有りませんし、難しい事もわかりません。しかし、今のこの腐りきつた世を憎み、革命を望む気持は、戦闘の情熱は誰にも負けないつもりです。牛の歩みに似て誠にのろいものではありますが、しかし、確実に前へ、明日に向つて目的意識的に前進しております。今まで何度も便り出そうと思つたの



自画像

ですが、その度に「俺は無知だからカッコ悪い」etcと考え日和氣に負けておったのです。徹底的に自己批判しております。「無知だからと引込まず、その無知」を穢す事なく表に出し、そうする事によって、相手から数々の助言、指導批判を受けそして、それを僕の成長への糧とすべきであると考え、あえて「無知」を省りみず凶太く、兄の革命的血を肉を分けて貰うつもりで、こうしてペンを取っております。何分よろしくお願い致します。さて、「監獄法撤廃に向けて」ハ注 これは筆者がかつて大拘に拘留されていた時、あまりの非人間的扱いに抗して書いた小論文パンフレットのこと、

やっと七月二六日に入りました。なんと差し入れから一ヶ月以上もたつていました。この間敵は「検閲中や」と逃げつたのです。「不逞長期検閲の理由釈明せよ」と出した願書が十五枚、来たのがりです。全く最近の敵のロコッな反革命強圧にはアキレ果てるばかりです。

中略

僕は今の赤軍や日共革命左派の同志達の戦術にはチト、納得できません。ゲリラ路線は全く異議ありません。僕もこの路線（革命戦||ゲリラ戦）しかないと考えます。しかし革命戦を開始したならば、ゲリラ戦を始めたならば、ゲリラに

徹しなければアカンと思うのです。ゲリラ戦の必須条件は敵の不意をつき、必らず勝利し、何よりも最少の犠牲で敵に最大の犠牲をであり、加えてより細心に計画し、より大胆に行動し、そしてより有効（効果的）にであると思ふのです。

中略

僕はどのセクト云々と言える程一人前ではないのですが、許されるならば全面的に赤軍、日共革命左派等の革命戦派を支持します。他のセクトは論外です。あまりにカラにとじこもりすぎています。コチコチのセクト主義集団と思ふのです。

中略

僕達は（注）ここで僕達といっているのは、K・I君の他に、もう一人やはり一般刑事犯の少年で階級的にめざめ、勉強を開始したY・S君がいるからである。今までシャバで多くの人達をこまらせ、泣かし続けて来ました。そのほとんどの人達は弱いな層プロ人民だったのです。僕達はその事が一番苦しいです。一番悲しいです。そんな僕達でも何も言わず、過去を問わず、偉大な人民軍の旗の下で闘える機会を与えてくれた数多くの同志達、救済、何よりも偉大な闘う人民に対

してただ感謝の気持で一杯です。僕は人間的、階級的に目覚めたとは言えず、今まで人民を苦しめられた罪が消え、とは決して思っておりません。僕の罪を償うことがあるとすれば、それはたつたひとつ、闘う事であると思います。常に人民の先頭に立ち、命を賭けて敵ブルジョワ共と闘う事だけだと思っております。今まで人民を泣かし、苦しめてきた僕が、長い間人民を苦しめ、傷つけ、殺して来た非人間的エゴ共、ブルジョワ共と闘うことだけです。マンガにこんなのがありました。「我々は青春を全てをかけ闘い死んで行く。」と。僕は正しくこれです。

中略

僕は僕の青春を命を全てをかけて闘いそして戦場で倒れて行きます。決してヒロイズムなんかではありません。僕は僕の償うことのできない罪を少しも償いたいから闘い死んで行くのです。いわば自業自得です。しかし、決して悔いはありません。偉大な人民の先頭に立って闘える事、多くの同志と一緒に闘う事の出来る事は素晴らしいことです。幸せなことです。又、便り致します。真の平等の獲得の為に！世界の闘う人民万才！日本革命自殺部隊兵士、K・I」



彼の最初の手紙は以上の通りです。その後も刑が確定して刑務所下獄するまで数通、私宛の手紙が来ましたが、長くないのでここでは省略します。もちろん彼の階級の自覚が本物であるのか否か、は私には何とも言うことができません。信ずるのみです。確かに親兄弟からも見棄てられ、逮捕されようという何が起ころうと心配するものは誰一人いないという彼が、左翼文献を知ると同時に、左翼系の救援組織の存在を識り、そこからお金とか本とか衣類を、無償で差し入れてくれるという、今までに一度も受けなかった恩恵を受けられるということで、彼がそのためにわざと左翼面をしているとも考えられます。しかし、私は素直に彼が階級的にめざめつつあるとらえています。

その証拠に、彼はその後、彼を含めた一般刑事へのあまりの非人間的扱いと処遇の改善要求と、差別待遇に断固抗議して、無期限ハンストを行っていました。この処遇改善要求のハンストは、結局、ドクターストップで十日間で終わりましたが独房の中で全くの孤立無援の状態の中でハンストを十日間もすることは並大抵の決意では実行できません。何故ならハンストを行えば、切置所の秩序を乱したということで、一切の人間の自由をへく奪する、オリの中のオリである懲罰房へ何日間か入らねばならないし、また、

懲罰房へ入ったということは身上書に記録され、後の刑務所生活では非常に不利となるからです。K・I君は少年院へも行っており、この社会(刑務所等)のしくみをよく知っておりながら、敢えてそれを承知でハンストを行ったのです。これをいかにとらえるべきなのか、いうまでもないことです。

永山則夫が共感を示したE・クリーパーは決して一人ではなく、この腐敗したブルジョワ社会がある限り、第一、第二のE・クリーパーや永山則夫が必ず誕生することを、このK・I君の存在は意味しているのではないかと私には思われます。

### (三) 出口のない入口、入口のない出口

「出口のない入口、入口のない出口」は主に日記です。この日記は一九七一年の三月、板橋の愛誠総合病院神経精神科で十日間行われた、永山則夫の精神鑑定時の模様を詳細に記したものです。精神鑑定の結果は申すまでもなく全く無駄でしたが、ここで注意すべきことは、この精神鑑定が検事尋問審理の所為で行なわれ、永山則夫自身が「私に対して計画的に、また少し語意を柔軟にして故意にこの(精神錯乱)精神状態に陥れさせよ

うとしたと、強度にその疑惑を生じさせようとした」と思わせる節があったし……と感させるものがあつたということです。ということは、あるいは権力側に永山則夫の現在を抹殺し、狂人として彼を片付けようとする意図があつたかもしれないかと疑えるからです。何故ならその意味もなく、当時、僅か十八才の少年が四人の人間を殺すということ、ブルジョワジーにとって信じがたいことであるからです。しかし、永山則夫は狂人ではなく正常な人間であるのです。ブルジョワジーは検事が真に永山則夫を殺人へと駆りたてた因を知りたければ、次の永山則夫の文章を読むべきではないでしょうか。

「貧困、ただそれだけ資本主義生産様式から形成される現代日本帝国主義国家形態の無知の涙、これが犯罪方程式だとだけはや言えた。上述の方程式が資本主義的独占経済体制内での凶悪犯罪の原因の根源である——これを、この悪循環を解決しない限り、凶悪犯罪は増加こそすれ、撲滅することは絶対に不可能であろう。」(三月四日の日記)

もちろん、これを居直りといえるし、社会への責任転嫁ともいえます。もし、そうであるなら、永山則夫にとって、獄中での学習とは自己正当化であり、文章化作業とは自己の無罪の主張でなければ

ならないのです。ところが、永山則夫は決してそんなことは主張しておらず、むしろ逆に、自己の殺人という行為を動機にして、自己の存在を確認しようとしたのであり、そして、その確認の上に立って始めて、先述のように言っているのです。このことは、次の三月三日の日記にはつきり現われています。

「また、死刑囚であること、そして現在の体制を認めたい私は、以降の日々において半ば公然とわが勉奮行糧とするものを妨害されても、何も文句は言えない……。それに、敵対行為であるこの私の勉強は権力にしては御意のまままでござるのであるのだ。革命運動とするものが、一層遠のいた昨今の社会状況にあっては、それは尚更である。それにしても妙な——そう、奇妙というしかねえや場処で自覚したものである。(嘆いてんじゃねえと)。念のため)」

ある意味では皮肉としか言いようのない自覚の場所であるが、とはいえ、この永山則夫の自覚の意味するものは非常に大きい。何故なら、永山則夫が宗教への道にも行かず、反省していない子(ブルジョワヒューマニズムのな)にもならず、また、殺人の許しを乞わず、ひたすら自己の存在の確認のための苦しい道を進んだ結果であるからです。改心し、あるいは信仰し、神の慈悲にすがることが、も

と安易で楽なことであるのです。ところが、永山則夫はこれらを一切拒否し、自分のような存在を必然的な存在として存在させている社会とその構造そのものを問題の対象として追求し、現在に至っているのです。その意味で、永山則夫の立場はプロレタリア民主主義的な傾向の立場であるといえます。私達が永山則夫の文章を読み、彼を論ずる場合は以上のことを忘れはならないと思われます。

#### (四) ハイエナを見たり

ここでいう「ハイエナ」とは、ブルジョア階層のことであり、日和見主義者のことです。この「ハイエナを見たり」の章は、高岡忠洋氏と永山則夫の論争が主です。この論争とは、高岡忠洋氏が一九七一年の新日本文芸八月号に約九頁にわたって、永山則夫の本について批判を書いたことに端緒を發しています。永山則夫から見た場合、高岡忠洋氏の立場は結局、小ブル知識層のそれではさなく、それ故、永山則夫への同情（「連帯」）もその域を出ないものでしかないということなのです。例えば、現在の永山則夫からすれば、かつて「無知の涙」で並々ならぬ共感を寄せた「李珍宇」に対しても次のように変化しています。「ほくが思

ったことには、珍宇が、マルクスは勿論のこと、彼のあの当時の思考を規定していたところの、実存主義思想（客観的にはどうみても、あの著作からはそのうしかと）とこと以外は思想性においてできない）に気づかずに——このバカ者が、実践的「祖国統一」運動をする時、何を土台にして行おうとしたのか（未だにだれにもそれは知れずじまいであるが）。もしもそれが実際のものとなった場合マルクス主義運動でしかそれを行えないのを認知してであらう。しかし自己自身の生命が惜しくって、キリスト教者に墮落して逝ちまっただけの人の多少『頭が良し』という言葉にうかされて暮しているのに……」。

という具合です。というのは階級的に自覚した永山則夫にとっては、それなりに自己の存在を確かめていた珍宇が、その自己存在を止揚するための唯一の道である、共産主義への道を選ばず、もっとも楽な道、良い子としてのキリスト教への道を選んだことが、許しがたいからであるのです。ところが、高岡忠洋氏は永山則夫が珍宇に共感を寄せていた当時の立場において彼を批判しているのです。そして、決定的な点は、高岡忠洋氏が、もし、永山則夫が貧困ではなく、彼に時間と金があったらとして、次のように結

論していることです。

「しかし永山則夫にとって、さしあたりそれ『対目的自己否定の貫徹』は不可能であった。もともと、このような能力があったならば彼は決してあのような罪を犯しはしなかつたからである。』この結論は永山則夫にとっては受け容れ難いものであるのです。何故なら、永山則夫とすれば、『もともと』このような他者能力のもともとは、要するにブルジョワ階級に生まれたなら今度の事件は引き起こしていない、ということになるからです。ところが高岡忠洋氏はこのことに気が付いていないのです。そして、それはかりか、高岡忠洋氏は更に「彼にとってはかつてない安定感、時間的余裕を保障する獄中で行なわれたことを忘れてはならない。」と永山則夫の書入行為を意味づけているのです。つまりこれは、永山則夫のこの間の生活過程、中学もろくに出席しないで卒業したという事実、それがどういふ事態を生むかということ——基礎のない勉学（幼児期のそれも入る）——というものがどういふものであるのか。そしてこれらの現実を形造っているのは何か、を一切捨て去っているとしたか、永山則夫には考えられないのです。つまり、永山則夫の次の文章を認識してはいない限り、私達は永山則夫に近づけないということ

「私は現憲法による最低限の生活保障からも疎外され、それを与えられなかった。したがって、ほくが、この地に生命の善現をしては来たが、この国民であることを拒否できる立場にあるわけだ。その論点からすると、ほくがの眼前における反革命側（敵）——（日和見主義者及び小市民階級はもろんの）者たちは何時でも殺せる立場にあるということも満更牽引附会なことではないであらう。（敵を殺して）そこが犯罪というのだ、ということよ）そしてまた、その逆説として、私も何時殺されても何の文句は言えないという立場に存在するわけだ——要は殺すか殺されるかしかないということだ。私が、あの本をなせ出したかいずれわかるであらう……」。

そして、このことの一つの結果としてまとめられているのが「ハイエナを見たり——死する者より、その八十三」の、「驚産党宣言」草案です。この草案は次のように結論しています。

「自覚したルンペンブルジョアは、あくまでテロ活動のみにその実存をおくことを決意するものである。われわれの子孫のため、われわれの憧憬する真のプロレタリア独裁の国家形態——社会状態をこの地上のいかなる所にも構築せんがため、われわれは出来る限りを尽して実力で、ブルジョワジーをして戦慄せしめ

腰を抜かさじめ、小便を恐怖をあたえて  
漏らさしめよ。自覚したルンペンプロレ  
タリアは、共産主義的社会への地ならし  
をし、そしてそれを促進するためには  
如何なる自己活動の犠牲をも惜しまない。  
なぜなら、われわれは自己自身の生命発  
現しか失うべきものをもたないからだ。  
ブルジョワジーの、最期のその一個の吐

息までをも撲滅せしめよ。われわれは、  
未来のために屍ぬ。しかしわれわれのそ  
れによって真の自由を、われわれの子孫  
が獲得するのだ。万国のプロレタリアよ  
団結せよ!!」  
私は、この彼の一つの結実の内容を全  
面的には認めたい。がしかし、にも拘  
わらず、彼がどうしてこの結実へ到達し

たかを理解しているだけに、ある連帯感  
を持ち得る。しかし、私達が真に永山則  
夫に連帯するといふことは、第一、第三  
の永山則夫を輩出させない社会に变革す  
ることであり、現実的には、自覚した第  
二、第三の永山則夫を数多く輩出させる  
ことではないかと思う。

(辺境社・五三〇円)

△関連文献△

永山則夫著

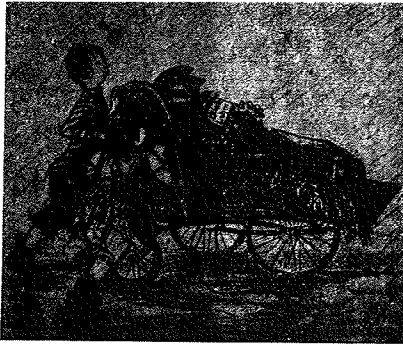
『無知の涙』—合同出版社

E・クリーパー

『水の上の魂』—合同出版社

〈評者は哲学科四回生〉

ハインリッヒ・チルレは、ドイツの石版画家・諷刺画家で、「ド  
イツ・プロレタリア美術の父」といわれ、一八五八年一月十日、サ  
クソニアの小都市ラーデブルグに、一職人の息子として生れた。彼  
は貧乏な境遇の中で成長し、一労働者から身をおこし、ベルリンの  
いわゆる「第五階級」の画家として、その生涯を、貧しい市民のた  
めにささげた一人である。



帰 路

# 人間の真情を歪める

## 官治と自治の牽引的關係

石尾芳久

### 沖縄の犯科帳

潮春嘉比  
明秀浜崎 編訳

本書は、いわゆる琉球王国の「平等所裁判記録」の口語訳である。周知の如く琉球王国の刑法典「琉球科律」(安永四年編纂着手、天明六年公布)は、明清律の影響をうけて編纂された律系統の藩法——肥後藩の刑法草書、紀州藩の国律、津輕藩の寛政律、土佐藩の海商律例に比して、それよりも早く、しかも正確な理解を以てする清律継受にもつく律系統の先駆的刑法典である。この「平等所裁判記録」は、かかる「琉球科律」が実際の裁判において、いかに参考の参考とされたかを極めて詳細に物語る記録であつて、そのすぐれた口語訳を「沖縄の犯科帳」として公刊された意義は、誠に大きいといわなければならない。

本書について私が深い感銘をうけたことは、右裁判記録にあらわれた「琉球科律」と「内法」との微妙な牽引的關係である。「内法」とは、編訳者によれば、「内法は村、間切等の生活協同体の風紀・衛生・農事・納税等の生活面においてその共同体の秩序維持のために、住民の守るべきこと、禁すべきこと、およびその違反者に対する処置の基準を定めた不文法である。この内法は原則として全住民(あるいはその代表者)の集会たる『村揃い』で、基準を協議し決定するのでこれを『村吟味』ともいい、またこの基準をもとに村を管理し監督するので『村

繕り』とも称した。」とある(同書解説)に於て、「内法」は、近世法の村法にあたるものとも考えられるが、しかしこの村が、一門、親類、与中といった構成からなっていることを思うならば、その実質は、宗族の法とみなすべきものが存すると考えられる。

窃盗事件において、「具志川間切上江州村境内居住小堀村三男当蔵二十六百姓素立」の大城子なるものは、「脇方盜律」及び先例により、慶良間島へ二年の流刑に処するのが適當であるが、大城は、一門、親類から「氣隨意者」と指彈され宮古島へ流刑を仰せつけられたいと願ひ出されているので、先例もあることにより、申し出の通りとする。二年たつてのち、親や親類達から願ひ出があれば、赦免を仰せつけるとある。餘狂者において「泉崎村三男当蔵三十六百姓素立」の喜瀬氣登之は、酒を飲んで乱暴したという行為により、先例によれば寺入り四十日分の刑に処すべきであるが、一門、親類どもから「氣隨意者」だから懲らしめのため宮古島へ流刑にしたいだきたいと願ひ出があるので、願ひ出の通りとする。右の如き事例は、これ以外にも認められる。かかる願ひ出、すなわち「内法」にもつく願ひ出は、「琉球科律」に依拠する制裁の減輕ではなくして加重を望んでいるのである。減輕への願ひ出は、一

も存在しない。これは何を意味するのであるか。「琉球科律」と「内法」とは、決して矛盾しない。対立抗争の關係にあるのではない。「内法」は、「琉球科律」に依存している。「内法」は、むしろ「琉球科律」の志向するものをいわば先取りしているといつてよいのではないか。それゆへ、「内法」は、決して村の自治的法規ではない。

「内法」にもとづく制裁は公認される場合があるが、その執行に關し行き過ぎがあったならば、権力は、直ちに「喧嘩打擲之律法」にもとつき、しかもそれを加重してこの行き過ぎたものどもを処罰している。これは、殺傷事件において、「村の中を歌を歌つて通つたというので村中の者が集まつて棒でなぐつて、ひどい傷を負わせた事件」について認められる。権力がそれを「喧嘩打擲之律法」にもとつて処罰したことは、「内法」による制裁の公認が、決して村への裁判権や刑罰權の部分的移譲を意味するものではないことを、最も明白に示している。公認は、私刑の黙認にすぎないのである。私刑が自治的制裁の段階にまでたかまることを権力は拒否するのである。この限界内において、親、一門、親類——宗族が「琉球科律」の志向するものを先取りするような、そのような性格の団体であることを、権力は、むしろ期待している。

のである。「琉球科律」と「内法」との微妙な牽引的關係といつたのは、この意味においてである。

右と同様の事柄を、清律と宗族の私刑との牽引的關係についても指摘できるのである。この問題について洞案を示された滋賀秀三教授は、「清朝にかぎらず歴史を通じて、中国において、官僚によって構成される國家の統治機構と、人民の側から発生する自治的な組織とは、制度的には結合され難い傾向をもつていた。この傾向に対する歴史上殆んど唯一の例外的現象として挙げられるのは、明初の里老人の制度である。(中略)しかし、この制度はいくばくもなくして形骸化し、所期の目的を果さなかつた。恐らく、真に善良な人士は官憲の下受けのな職に顔を出すことを避けようとする中国社会に根強い傾向のゆゑに、里老人にも然るべき人が得られなかつたことによるのであろう。この失敗の事例によつても官治と自治が如何に結びつき難かつたかを知る事ができるであらう。宗族の自治も國家の統治から截然と切り離されてきた。兩者は離れてこそ、それぞれの持味を生かして機能することができ、という性質のものであつた。つまり、制度的には別世界に併存する二者が機能的にはまさしく相補う關係があつた。宗族の側で、官憲を最後に頼るべき後楯として

意識していたことは前述のとおりであり、また官憲の側においても、民事的な紛争や軽微な犯罪が宗族の手で処理されて、

送一國家の法廷まで持込まれてこないこととは、『官事少』という政治的理想を實現する上に極めて好ましいことであつたに違いない。」とのべられている(『清朝の判例に現れた宗族の私刑』——『國家学會雜誌』第八十三卷)。

滋賀教授の右の叙述の中にある、國家の統治から截然と切り離されている「宗族の自治」とは何か、いふまでもなく、教授も、この「宗族の自治」を眞の意味の自治の系譜にあるものと考えられているのではない。國家法の志向するところをよく先取りしてくれるような「宗族の自治」に法的枠組みを与えるならば、先取りするという妙味は、ほとんど失われる。國家の統治から截然と切り離されてゐるというのは、國家の統治が干渉してゐるといふのは決してない。反対であるというのでは決してない。反対である。宗族の共同体的結束を生かしながらも、権力の志向を先取りしようとする強固な団体に転向せしめるという政治的配慮にもとつき、不斷の思想教化を行うのである。それが儒教倫理的な政治的教化である。法的枠組みではなくして思想教育的枠組みによつて形成されるところにこそ、共同体の転向——家長的のライトルギーの団体の本質が存する。清律は、

かかる宗族(家長的のライトルギーの団体)の教化的自治と牽引的關係にあるのである。それはまた家産官僚支配の本質を示すものでもある。家産官僚制は、共同体の家長的思想教化の育成に深く依存しているのである。

琉球王國が諸藩法にさきだつて、最も早く清律を継受し、その影響による刑法典を編纂した事實の理由として、右のべたような「内法」を生み出す「宗族の自治」——村の自治の性格を考察しなければならぬであらう。

「琉球科律」の公刊という重要な仕事をなしたとけられた宮城榮昌教授は、その解説で「科律全体の量刑は清律に比し一般に軽い。たとえば前記の脇方法や法不枉法などその一例である。その他、監守盜・御物盜・枉法などにも、死刑の極刑はない。沖繩は近代まで殺人犯をみないところであつた。それだけ重刑による予防を必要としない処であつた。」とのべられている(『琉球科律糾明法案』吉川弘文館)。ただし、これには例外がある。「琉球科律」と發条に次の如き条文がある。

一和姦を犯男女ハ寺入八十日、(本文)之通ニテ難差通情犯者ハ増減するとも發議次第)

夫有之者ハ流三年、(姦情又人品ニ)より本文之通ニテ難差通者ハ、流十

年以下へ加減を以治罪するとも發議  
次第 婦人へ(婦女犯罪律見) 議  
罪可有之

附 夫有之者清律科定杖九十而

候得共、於御当地へ相応不致

故、本文之通ニ候、然共情犯

ニより清律之通ニ而相応可致

者も出来可致候間、其期ニ至

リ發議可有之候

右条清律科定杖九十というのは、実は  
明律を指すと推定されるが、明清律に準  
ずる場合があるとしながらも、条文では  
流三年、しかも會議次第により流十年に  
なることも考えられるという明清律に比  
較して、はなはだしい重刑を科している。  
そして、裁判においても、右条文の通り  
の判決が見出されることは、「沖繩の犯  
科帳」の明白に物語るところである。森



木賃宿

清律を貫く家庭的権  
力関心よりも、より  
権威的な権力関心が

通事件において、男女共、すなわち、た  
ら玉城は、渡名喜島へ三年の流刑、まか  
は、慶良間島へ三年の流刑、と決定され  
ており、「犯姦律」によるものであること  
を明記している。

共同体を家父長的ライトゥルギー的団  
体に転向せしめるという政治的配慮が、  
明清律のそれよりもより強烈であったこ  
とを認めることができるのである。そこ  
に清律の先駆的継受の理由を指摘するこ  
とも、決して不当ではないであろう。「  
平等所裁判記録」には、「位牌・墓所に  
関する事件」が、極めて重大な問題とし  
て取扱われている。そこには、共同体を  
つつむ宗教的情操と政治的配慮との深い  
つながりを見ることができるのである。  
一般に明清律を継受した諸藩法が最も  
多く参考としたのは、刑律及び名例律で

諸藩法の背後にひそんでいることを示す。  
それは幕藩体制支配の本質にかかわる問  
題である。「琉球科律」もこの例外では  
ないのであった。職制律を欠如している  
その編纂より八十五年後の天保一年の「  
新集科律」には認められるが、それが人  
事行政に関連するかという観点にもとづ  
いて、更に検討する必要があるであろう。  
私は、本稿を草するにあたり、森永種  
夫氏の「犯科帳——長崎奉行の記録——」  
(岩波新書)を読みかえてみた。両記  
録の相違は、極めて印象的である。長崎  
奉行の記録に比較して、「沖繩の犯科帳」  
の民衆の貧しさは、重く悲しい。「沖繩  
の犯科帳」の「位牌・墓所に関する事件」  
の中に、「一人の女が発狂して、町なか  
をうろついているのに、引取り手がいな  
い。いないのでなく、実母もおり、親類  
の者もいるが、互いに押しつけ合って引  
き取りうとしない」という事件が紹介さ  
れている。この女性は、七才の時、将来  
「遊女になるはず」で遊廓にあつてられ  
十一、三才のとき実母のもとに抱え主の  
気に入らないという理由で帰されている。  
「十五才のとき家の都合で再び遊女に売  
られた。」遊女稼業で自立した時、「  
実父の位牌を預っている小橋川家に正月  
、盆の焼香に行き、また位牌も見苦しく  
ないものを寄進している。」それから  
結婚し「何人か夫をかえたようである」

という経過をへて、発狂したのである。  
編訳者は、この事件を解説されて、「恐  
らく遊女稼業中に知り合った男を、次か  
は彼女と渡り業中に見えたのである。こ  
れは彼女の性格の異常を暗示するかに見え  
る。」とのべられ、また、「このよう事  
件は『科律』にも該当する条文がない。  
平等所役人は『清律』までも引き出して  
審理を遂げた。」ともべられている。

しかし、それは、「彼女の性格の異常」  
といった問題ではない。遊女稼業をしな  
がら実父(生存の実母への贈物でないこ  
とに注意)の位牌を見苦しくないものを  
寄進したというのは、彼女の实父への強  
烈な真情を示している。かかる真情を位  
牌の寄進という行為でしかあらわしえな  
かったところに「内法」の問題があるの  
である。鮮烈な真情と遊女稼業との分裂  
の恐ろしさは、今更いう必要もないであ  
ろう。彼女の性格が正常であるが故に発  
狂したのである。「内法」の意味するこ  
ころが極めて重大であることを、かかる  
事件に即してもまた、看取することがで  
きるであろう。

〈評者は法学部教授〉

(平凡社・五〇〇頁)

# オキナワの少年

東 峰 夫 著

## 表現しきれない「悪」

小川富雄

訴える作品として

先の芥川賞受賞作となった「オキナワの少年」は、五月十五日の沖縄返還を前にして、いやが上にも反響が大きかった。同じ日本人として再出発する沖縄人民を尻目に第三者的な態度で傍観する人も少なくはないが……。

著者の東峰夫氏はフィリピン生まれで戦後沖縄に引揚げて、美里村、コザ市で育った、れっきとした沖縄人であり、作品は彼自身の沖縄における少年時代の体験をもとに書かれている。したがって舞台となっているのは基地の街のコザ市である。沖縄の経済は基地経済、あるいは

股間経済と称されることく、その大半を米軍基地に依存している。そういう意味でコザ市を語ることは沖縄を語る上で欠かせないことではないだろうか。

さて、作者はこの作品で何を語りたかったのだろうか。

「はだか沖縄」（青い海出版）で作者はこの問いに対して次のように答えている。（汚濁に満ちた現実というが、環境を、本土の人に知ってもらいたかったのです。ですから単なるメルヘンではなくて、訴えに満ちた作品だと解してほしい。）私はある程度までは作者の意図とおり受け取ることができた。確かに寄生虫のごとく基地にしがみついている島民の姿が生々しく描かれている。しかし、それぞ

れの場面においては描写が簡潔すぎるため、強烈なイメージを私自身の内部に引き起こすには至らなかった。沖縄について未知である人々に、汚濁に満ちた現実を知ってもらうためには、最少限の想像力を以って最大限知りうるような克明な描写が必要ではないだろうか。

少年は無入島へ

この作品のクライマックスは、やはりロビンソン・クルソーの無人島にあらがれた少年の島からの脱出であろう。このことは単純に現実からの逃避だと言いきれないところに問題がある。彼らの生

存は基地を抜きにしては考えられないが、一方で基地が投げかける問題は、生存することの代償としてはあまりに大きすぎる。一個の人間としてはまだ形成途上にある少年達にとってはなおのこと荷が重いのである。現実には押しつぶされそうな無抵抗の少年のとりうる道は、島からの脱出、以外にない。基地労働者として働く一方では売春宿を経営しておりながらも豊かにならない一家の暮らし。その暮らしたに追われっぱなしの両親からの叱責、厄介者扱い。生徒会費が紛失すると犯人扱いされる……。少年にとっては日常は忌むしい出来事の連続に違いない。

さて、島を脱出した少年はめざす無人島に何を求めているのだろうか？ 彼自身、あるいは基地に生きる人々の在り方を問うことに他ならない。彼らに対する不信感に導かれて……。したがって、必ずしも無人島という場所に限定することなく、沖繩以外の地であれば彼の満足いくところであらう。

## 日本語

この作品には沖繩の方言がふんだんに盛り込まれているが、これは全体のふんいき作りが大きく貢献していると思う。

聞いて、解らぬといわれる方言が、諷

んで、結構理解できるのは、作者が言い知れぬ苦心をしているのだから。元来、日本語を祖語としているのであるが、現在に至るまでに数百年の空白期を経て、独自の発達を遂げたであろうから、やはり至難の業であろう。

## 凸と凹は

この作品では売春婦の問題も大きくクローズアップされている。女子就労者十人中一人がこの職業に従事していると言われているが、復帰後、売春防止法が適用され（これは本土並に）、彼女らの生活基盤は根底から崩壊するであろう。見返りとなる筈の十全の策が施されぬままに……。

少年の家も売春宿を開いているので、否応なくセックスの洗礼を受ける。こうして幼年期にすでにセックスに対する偏見を植え付けられるのである。以後、セックスの在り方を問うことは許されないのである。

「子どもがするみたいに、それをいじくっているうちに、不思議な、夢にみたことのある快感がよせてきたんだ。見る」と青芽の匂いがする液が草にかかっていた。……凸には凹がなければ快感が得られないということではなかったんだ。；

： 渴いたのどに水を流しこんだ時のような和んだ気持がして……」

ここには性のめざめが嫌味な描かれている。暗に凹を求めて女性の間人関係を侵襲し続ける米兵に対する批判がこめられている。勘繰れば、米兵の健全な性を否定する戦争の策動機関（言うまでもない）に対する痛烈なフィロニーでもある。

とかく陰鬱で深刻な問題となる性か、この作品では良い意味でも悪い意味でもサラリと扱われている。視点を、少年の眼、に据えるのとこれ以上にもこれ以下にも書けないのかもしれないが、基地からむ売春婦の問題が大きく根を張っている以上、どうしてももの足りない気がする。あるいは性に対するモラルが低下している権利意識が薄弱であるということ

湾からの人々、そして混血の人々を差別しているといわれる。また、それら差別されている人々の間ですら、差別が行なわれているともいわれる。こういったことを背景にして、「……あのね、朝礼の時間になつてこさんの席に髪をのびした男生徒が、うつぶせに顔かくして、ねているのを見たというひとがいるのよ。」

「えっ？ じゃぼくもうたがわれているんですか。ちがいますよ！ ぼくは！」

ただ髪をのびしているということだけで疑われるなんて、なんたることだろう。（という箇所は盗難の一件は、サイパンから帰還した少年の一家が差別されているということ、作者は意図しているのだろうか？ もしそうだとすれば、読者になんらかの註解を与えなくては作者の意図は正確には伝わってこない。

## ここにも差別の中の差別

## 政府とニコヨン

沖繩が日本から差別されているように（私は差別していないつもりだし、他の多くの人が特別な感情を有するということとはないと思うが、一部でそういう偏見を抱いている人もいられるだろう。そういう人々、復帰に際して適切な施策を十分になしえない政府とを指す）、沖繩本島の人々は奄美大島や他の離島、あるいは台

以上、だらだらと思いつくままに書いてきたが、ここに書きうる以上のものを私がこの本から得たということは断言できる。

五月十五日に沖繩が日本に返還されたが、マスコミはその後の沖繩で物価高に悩む沖繩の姿をぞくぞくと伝えている。本土の水準以下の生活を強いられしてきた



島民が喜び(?)とは逆にいつまで生活の不安におびやかされるか定かでない。これは日本政府の偏見と欺瞞に満ちた施策が解消された時、自ずと解決されるに違いない。

作者は「ニコヨン」続けて、真実を、体験を、描きたい」といっており、「体験をとおして日本の、沖繩の胎部をえくり社会を告発し続けていく」という態度を貫く限り、私たちにアビールする作品が、間断なく生まれてこよう。

種々の問題に引き回された草句、皮相的な、強烈な訴えのない作品に終ったと思われる「オキナワの少年」を避すに、一つの問題をじっくり掘り下げた作品を望んで提言としたい。

〈評者は経済学部三回生〉

(文芸春秋社・五〇〇円)



# 帰ろうよ うちなあんちゅ

末吉栄三

## オキナワの少年

1 芥川賞には限らないが、私は、およそ「〇〇賞」とつくものには締めてイヤな感じを持つている。もつとはっきり云えは「〇〇賞」の名札のブラサガッテいるものは信用していないと云つてもよい。それはひとつには、賞を授けられたものとそうでないものとの間に、一般的にはそれ程質的差があるとはとても思えない事にもよるが、さらに当然のことだが、ナントカ賞等というものは、それを授ける方、つまり「選者」の物の見方・考え方に大きく左右されるものだからである。(この場合の「選者」には、いわゆる直接的選者とそのウシロ

にいる多種多様なスポンサーをも含んでいる。)下は勲何等とかいうフホらしい「叙勲」から始まって、上は町内会のネズミ獲り競争まで、コトホドサヨウニ変りはない。

東峰夫(本名・東恩納常夫)氏の「オキナワの少年」が何故、芥川賞を受賞したのかは、文学的素養など皆無に近い私等に解らうはずもない。例えは芥川賞選評で丹羽文雄、大岡昇平の両氏は「沖繩の日常語」・「沖繩方言」使用の「目新しさ」や「濃厚な風俗性」等を挙げているがソレハソレダケノコトで、どうももうひとつ解りにくい。文学界新人賞の

選評でも、それ以上の積極的評価は見当らない。が、どうもひどく気になる事がある。それは「一九七二年」の今、「日本国」がまたもや沖繩を軍事植民地にすべく土足で乗り込んでくるこの時、「沖繩返還」の年に、「在日沖繩人」作家・東峰夫氏の「オキナワの少年」に日本文壇の最大の登竜門のひとつ「芥川賞」が授与された事に、否定し難い「政治」の臭いを感じるからである。「それは考え過ぎだ。」といわれるムキもあるかもしれないが、しかし、東氏同様「在日沖繩人」のひとつりである私には、その臭いが、どうしようもなく鼻につく。クサイ!

クサイ！むせるようだ。

## 2

え抜けば、「これはかなりオモシロイ小説だ」「オモシロイ」という表現が適切かどうかは知らないが、「うちなあんちゅ(沖繩人)」である私自身にはその「うちなあんちゅ(沖繩語)」を主体にした文体によりかもしだされる何とも云いようのない「おかしさ」と「かなしさ」がモロに伝わってくる。いかにも「うちなあんちゅ」的な日本語(いや正確には日本語的「うちなあんちゅ」といった方がよい)でおかしさがこみあげてくるのは例えば、娼婦の「チーコ姉」の話のことばで、「わたしシミーズぬいでさあ、ふりかえったらさあ、部屋のすみでふるえてかかんでいるんよ。××ボつかまえてさ、ハッハッハ、どうしたのよ、ワッツマラユと聞いたらさ、こわいアイムスケーヤ、メイビーV・D(注 V・Dとは性病のこと)っていうんさ。だとか、「ほんとさあ、ズケランの家族部隊でメイドしてた時もさ、スタップサーズンでミューラーという、いいにんげんだったけどさ、その子で十二になるのがいたんよ。わたしがトイレにはいるとドアをいたずらするしさ、シャワー浴びてるのどきにくるんよ、手あらうふりしてさ。あんまりうるさいから、ママさんがミリーングにいってあるあいだにさ、と

っつかまえて習わせてやった！」というよな語り口である。これはもう理屈抜きにキレたところだろう。この感しが多く日本(やまうちゅ)の読者にうまく理解されているかどうかは知らないが、私の友人達は「かなりよくわかる」そうだし、東北出身の彼など、言葉使いそのものもかなり自分達の方言に近いものがあるといっている。

もっとも、「うちなあんちゅ」が主題のひとつとして登場してきたのは、この「オキナワの少年」が初めてではない。五年前に、これも「芥川賞」を授与された沖繩人作家・大城立裕氏(「カクテルパーティー」で授賞)の小説に「実験方言をもつある風土記」という副題のついた「亀甲墓」という作品があるが、こでも話したことばは「うちなあんちゅ」が使用されている。この作品は、大城氏自身も「カクテルパーティー」より文学的には質の高いものとしているが、その「方言」のせいか、あるいは主題が「日本人選者」の好みにあわなかったのか、「芥川賞」にはならなかった。

「オキナワの少年」がこの「亀甲墓」に多大の影響を受けたらう事は想像にたたくない。しかし「亀甲墓」においては話しことばだけに限られていた「うちなあんちゅ」を、東峰夫氏は地の文にまで拡大している。それが「オキナワの少年」

の語り口としてまことに自然なのである。「胆がホトホトにきてて」、「目尻がジタジタしている」、「イッサン・ゴ・ゴ」にげていった」などという表現は沖繩で日常的に使われる「うちなあんちゅ」である。これはどうもピタッとくる日本語が見つからない。無理に日本語にすればその言葉の持っている情念の大部分は明らかに失われるのである。

明治における天皇制日本帝国による沖縄併合は、まず「うちなあんちゅ」の抹殺と皇民化教育から始められた。第二次大戦の敗戦までそれは執拗に徹底して続けられたが、それでも「うちなあんちゅ」はけっして滅びなかった。それは民衆の中で太い水脈として流れ続けてきたのである。

## 3

内容は読んでもらうしかないの  
「オキナワの少年」一島でのさようならの両作は、前者の主人公が小学校から中学一年生(?)くらい少年、後者のそれが一年生頃から高校(中退)、そして二十三才までの、少年から青年にかけての世代である事を除けば、主な舞台が沖繩の文字通り基地の街「コザ」市である事、主人公の名前もつねよしとつねお、最後にその主人公がモロモロの意味で「オキナワ」の現実耐えきれなくなつて「脱出」してゆく事など、ほとんど

同じ構成であり、そういう意味ではこの二作は相補的な「続きもの」だといつてもよい。売春宿・娼婦・米軍基地・その基地に隣合せの小学校・米軍による事件事故・琉米親善センター・台風・墓の中から発見した日本軍の鉄砲・米軍のヨットハーバー……「オキナワの少年」

戦東(米軍《基地》から物を盗むこと)・入軍用犬の哨戒ありV・娼婦と混血の子供たち・軍作業・黒人兵……(島でのさようなら)  
オンパレードとも云える程に、いわゆる「オキナワ」的なものが出てくるのは、むしろ逆にリアルさを減じている感があるのだが、今はそれは問わない。むしろ私の関心は、「オキナワ」から脱出した少年のその後にある。売春宿に象徴される「汚ない」オキナワ、そして、それに追いつき、むしろ、それを利用して生活している感さえある大人(両親)たち、「少年」は少年故にその様な「オキナワ」に耐えられず、この島を脱出してゆくのである。それはそれでよしとしよう。しかし問題はむしろこれからだ。今「大人」になつたツネオはどうするのか！作者・東峰夫氏は「オキナワの少年」で「芥川賞」を受賞した時、「もう一作だけ書きたい」という様なことを云っていた。それが「島でのさようなら」だとすると今後は書かないつもりなのか。もしツネ

オカどこの「無人島」人や「日本人」に同化してしまうのでなく、「沖繩人（うちなーんちゅ）」であり続けるのである。大人になった今、「沖繩」に「帰

還」しなければならぬまい。ツネオが少年の頃は米軍と米軍基地しかなかった「オキナワ」に、現在そして今後はあの日本軍とその基地も侵入してくる。情況はさ

らにキビシクなっている。その「沖繩」にいかにして「帰還」するか。それを是非書いてほしいと思う。そして、それは東峰夫氏同様「在日沖繩人」である私自

身の課題でもある。

（評者は工学部助手）

（文芸春秋社・五〇〇円）

# 白夜の旅人

—五木寛之の世界—

大坪 信 善

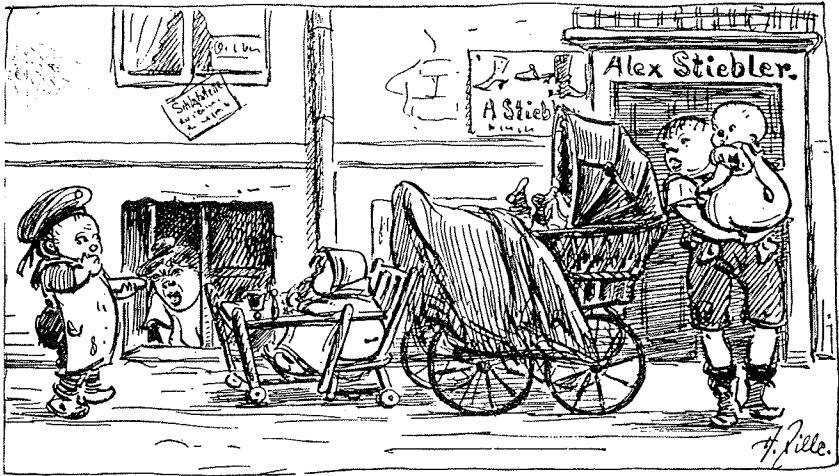
五木の作品はよくおもしろいといわれる。ベストセラーになるのもうなずける。

地獄を垣間観た五木

五木の小説は明らかに、現代の社会の新しい構造が可能にした、新しい道に立っているのである。小説の主たる材料が、テレビディレクター、呼び風、音楽団体

のプロデューサー、週刊誌の記者などという、今日の大衆社会状況におけるマスキミの第一線で活躍している、いわゆるカッコいい職業の世界を採っている。そ

して、その小説がこれらの材料を、文学的に安定した人間の側面からではなく、むしろ個々の状態の機能的な側面から描こうとしていることである。これはカフカのいう、職業が人間の唯一の存在様式であって、機能的、職能的にしか人間の存在はありえないし、人間の「本来性」などはもはや存在しない世界のように、骨の髄までマスキミ人間であるハードボイルド、虚無の騎を色濃く身にまとい、地獄を垣間観てしまった男たちが登場する。五木自身も二十代のある時期をマスキミの最下層ともいえるピラミッドの底辺で、どす黒い怨念と欲望と、満たされない野心のコンプレックスの中で生きていたのである。まさに地獄を垣間観てしまったのは五木自身であり、それが朝鮮からの引揚げという彼の原体験なのである。この原体験を通して、五木自身が怨念を燃やすように作品を書くのである。



「街の子供」より

故に作品は常に五木の異邦人の眼として捕え、書かれたものである。そこには常に五木自身の屈折した感情、アンビバレントな感情が挿入される。つまり、敗戦と引揚げという被害者意識と、朝鮮にいたときは抑圧民族、支配者としての加害者意識とのしたたかな認識が交錯するのである。

#### ゲリラとしての語部

漂流する異邦人の眼として、彼に見えて他の人々に見えないものを知らせるという語部というものに彼自身を置いている。だから本人もいつているように、文学をやるつもりで作品を書いたのではなく、エンターテインメントとしての商業ジャーナリズムに提出し、エンターテインメントという形を借りて、自分をとりまく状況に一丁、文句をつけてやろうと思っただけである。だから五木の作品は時代の表皮に密着するが、時の流れとともに消えてしまおうべきでないものばかりであり、それらは読み捨てられる光栄をになうべきであるという。五木の作品がおもしろいのは、文学として後世に残すために書かれたものではなくて、読み物として、読み捨てられるべきものとしての迫力があるからである。五木にとっ

て、エンターテインメントの読物は、エリートでない大衆の意識をゆり動かすアジェンダの役割をもつものとして認識されている。このことはアサヒグラフの談話で、「六〇年の安保闘争は、学生組織労働者、文化人、エリートの闘争にすぎなかった。バップ、佐竹や美空ひばりのファンである未婚労働者を今度は参加させなければいけない。このためにもぼくはエンターテインメントの読物をゲリラの方法で書いていきたい。」と述べていることからわかるように、五木はゲリラを志向しているのである。五木にとつて、ゲリラとしての荒野は、とりもなおさず、大衆社会状況におけるメディアの世界であり、そこに潜在する巨大な読者の谷にはかならない。文学を自己目的としてではなく、手段としている。故に彼はおもしろさに徹することとして、エンターテインメントの要素であるカタルシスやメロドラマチックな構成、物語性やステロタイプ的な文体などを、目的としてではなく手段として採用し、面白さの裏に問題意識を敷きつめておくのである。銃をもつて、どこかにひそんでいる者だけがゲリラではないだろう。ペンを握るゲリラがいても不思議ではないと僕は思う。

それにしても、彼の流麗な筆致と文章の構成力は、やはり一流の文学者であると思う。五年前、僕が最初に手にした本が『風に吹かれて』であった。軽妙洒脱な文章、素朴な人柄が滲み出ていて、普段着の五木寛之が感じられ、とても親近感を抱いてしまった。『キプリーの歌』『つばん漂流』などエッセイの類の方が小説よりもおもしろいというのも、五木のパーソナリティが、じかに伝わってくるからであろう。放浪の体験や苦学していた学生の頃、金沢に引きこもってからのオプローモフのような生活などは、当時、僕が受験勉強にいや気がさしていた頃、『風に吹かれて』を読むことによ

って気持が休らいだのを覚えていて。音楽の好きな僕としては、音のきこえてくるような小説、文体にジャズ感覚が感じられ、情感の豊かさに魅かれ、五木の世界に引き込まれていった。五木の論法では、エリートであるところの大学生が読むのは彼のねらいと反しているのであるが、今日、大学生は必ずしもエリートではないし、少年マガジンを愛読している大学生が多い今日、マルクスやレーニンよりもおもしろい五木の作品を愛読するの悪くはないだろう。ちょっと自虐的な感じがしないでもないが、五木のエ

ッセイは気安さ、庶民的感情において、ロシア文学でいえばドストエフスキーではなくて、ゴッリキーであると思う。ドストエフスキーは、日本では高橋和巳があたると思う。憂鬱なる党派ではなく、滑稽なる党派をめざす五木は、高橋和巳のように解体していくのではなく、漂流して行くのである。

五木には一種の居直りがあつて、これは野坂昭如とともに外地引揚派や遊跡閣市派の強みであるのかもしれない。漂流とは巻き込まれた人間の状況であり、小田実いところのあくまでも巻き込まれる側からの視点でものを観ることに共通しているように思える。

## デラシネ

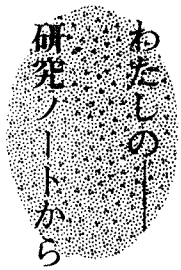
中間小説の多い五木の作品群にあつて『内獲夫人』は『恋歌』と『朱鷺の島』の同系列の作品であり、柴田翔の『されどわれらが日々』なんかとも同列の作品である。この作品は、五木が学生時代に内獲試験場反対闘争に参加した体験に基づいて書かれているが、五木自身の内なる告発である作品ではないかと思う。五木が早大の学生だった頃は、日本共産党六全協、スターリン批判、ハンガリー事件といった目くらむような価値転換と

思想的な混沌の時代であつた。あの時代に五木はもうすでに一枚岩の思想というものに幻滅を感じていたように思う。我々はとうであらうか。チェコ事件、ソニー虐殺などによって、ソ連の社会帝国主義、米帝国主義の構造を露呈された。そして最近の連合赤軍の事件によって、我々はまた屈折した感情を持たざるをえない状況がある。今年になって、なんとニュースパリーの大きな事件が相ついだことか、現実が大きく動いているのであるが、しかしながら、ものの意味と価値の拡散、内的秩序の分解が決定的なまでに進行してきている。現代においても

既成の制度への反抗として情念や狂気の噴出があるが、それがたちまち風化してしまうわが国にあつて、我々の存在を現代という時代に投射するとき、一体どのような形でかわりあつたらいいのか、ここに五木の白夜の季節の思想と行動が我々に一条の光を投げかけてくれる。白夜の季節とは、昼でもなく夜でもない感じ、影があるのかないのかはつきりしない。あれが木なのか建物なのか、敵と味方が微妙な形に入り組んでからみ合っている状況だろう。このような状況の中で一人一人がデラシネとして、人間でありつつける、主体性をもちつつける、デラシネとして、土地を奪われ職を奪われて帰るところがないという状況を逆手にと

って、それを被害から加害に転化する武器にすることである。インドシナをはじめとする半島には、『難民』（デラシネ）が『約一千万』いる。一九七二年に達成されようとしている米中ソの新たな『世界秩序』をくつがえすのが、韓国、ベトナム、パレスチナの根こそぎにされた人々であるような気がする。我々はデラシネとして既存の体制の中で学士をもつ商品として組み込まれていくのであるが、我々は一枚岩の思想のように、麻薬とか節を曲げないとか、いさぎよく生きるだとか、あいつは転向したとかではなくてプラスチックみたいな、燃やせば、まっ黒なベタベタなすべになってふりそび埋められても腐らないものを、踏んづけられても、変形はしない、だけにとぶとく生き残っていて、いつか巨大なマウスになって、一つの文明、体制を齧かすような生き方があるということをも五木は示唆してくれた。『日常性からの脱出』を続ける、白夜の旅人、五木寛之は、最近、休筆宣言をし脱文壇をしたばかりである。デラシネ—それは転身を求める若者の行動原理でもある。

〈評者は社会学部三回生〉



# 石舞台古墳の発掘

## —古代史の謎に挑むⅨ—

### 網 干 善 教

(一)

大和の飛鳥に古代の記念碑ともいいうべき石舞台古墳がある。春秋の觀光シーズンともなれば、飛鳥史跡をめぐる人が押寄せる。なかには石舞台古墳が古代の墳墓であることも知らない人がいて、時には晒然とすることもある。

この古墳は、いうまでもなく、わが国級の規模を示すもので、古墳時代後期の編年され、特別史跡に指定されている。江戸時代の記録によると、すでに古墳の上を覆っていた封土が取除かれ、路傍に巨石が墨々と積み上げられた絵が描かれている。私は幼少の頃、この近くで育ったから、石室内部が発掘調査される以前、東北隅の石の隙間から中に入り遊んだ記憶がある。

石舞台古墳は昭和八年の春、はじめて學術調査が実施された。当時京都大学の浜田耕作先生のもとで、本学名譽教授の末永雅雄先生が現地を担当された。この時の調査は主として石室内について行われたが、調査が進むにしたがって、方形の周濠があることが判明し、昭和十年の春、第二回の発掘調査が実施された。このときは、南側の周濠の発掘と復原、濠の他の部分の確認が行われた。ところがこの調査の後、第二次大戦の戦火は拡がり、以後計画された調査と復原は一時中断せざるをえないようになった。

昭和二十年、日本の敗戦によって戦火は鎮まったが、それからしばらくは社会的にも経済的にも不安定であった。戦後十年近くになって、ようやく日本の復興が軌道に乗り、再び石舞台古墳の調査、復原が計画された。そして昭和二十九年から三十三年の間、約五年の歳月をかけて、周濠の西・北・東側について行われることになった。この調査は末永先生の指導の下に私たちが担当することになり、関西大学考古学研究室の学生多数が参加した。

(二)

千数百年以前の大規模な巨石を検出し

た。石室を中心に辺約五十メートルの方形基壇があり、その斜面には径三センチから五十センチ程度の石が高さ約三メートルにわたって築かれていた。埴をはさんで外側には外堤が構築され、その内側の斜面にも同様な貼石の施設があった。

埴の幅は北が狭く、南が広い。これは正面が広く、背後が狭いというプランの上での計画であるのか、それとも北から東にかけて高いという地形的制約によるものか。あるいは両者の理由に起因するものだろうか。またこの発掘中、埴のなから多数の土器が出土した。一体何のための土器なのだろうか。

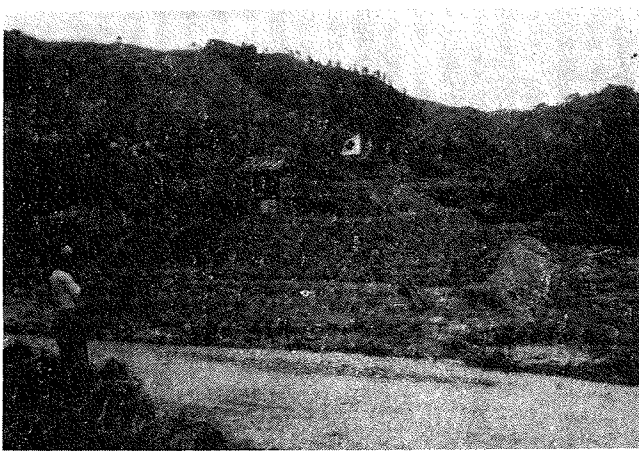
石舞台古墳の石室に用いられている最大石は、一個七十七噸もあるといわれている。こうした巨石を、どのようにして運び、どのような方法で積み上げたのだろうか。とにかく古代における一大土木工事であったらう。

外城一辺、推定約百メートルにも及ぶ外堤や一辺約五十メートルの基壇に用いられた貼石の量も莫大である。どこからどのようにして集め、運んだのだろうか。そしてこの古墳を造営するのに、一体どれだけの年月を要したのだろうか。また何故このような巨大な墓を造る必要があったのだろうか。そしてその人物は？石舞台古墳を、じっと眺めていると、

いろいろな疑問が次から次へと起こってくる。

莫大な石の量、それはこの古墳の貼石だけではない。私たちが過去十数年間、発掘調査をすすめてきた石舞台古墳の近

くの飛鳥京跡にも、敷石があり、溝石が使用されている。この量もまた、驚くほどである。



発掘、復原作業中の石舞台古墳（昭和29年度）

### (三)

石舞台古墳の被葬者は、蘇我馬子大臣だという説がある。その真偽の程はわからないが、若しそうだと仮定してみるとどのような事が考えられるだろうか。

日本書紀によると、馬子は推古天皇三十四年に薨し、桃園墓を造営したとある。ところが舒明天皇の即位前紀をみると蘇我の諸族らが、馬子の墓を造営していた内容の記録がある。すでに二年以上の歳月が経過して、まだ大規模な墳墓造営の工事が行われていたのであるか。

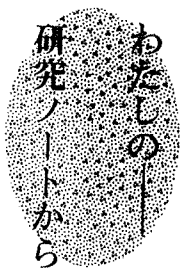
舒明天皇は三万余人を費して飛鳥に大溝を掘り、七万人を費して築垣したとある。時の人はこの大溝を「狂人の溝」と呼んだとも記す。この文章を読んで、石舞台古墳の築造の大事業も思い起させる。今から十五年前、私たちは石舞台古墳を掘ったが、これからも、この古墳をめぐる謎を追っていきたいと考えている。

（文学部助教）

# 日中文化関係史の一面

増田 渉

II



(一)

合信 (Hobson) のものは、医書ばかりではなく、『博物新編』も翻刻されている。私の所蔵する原本は「咸豊五年(一八五五)新鶴、江蘇上海墨海書館蔵版」で「英国医士合信著」である。内容は三集に分かれ、一集は「地気論」「熱論」「水質論」「光論」「電気論」となり、物理学の解説書といえる。二集が宇宙天文論といったもので、「天文略論」

「昼夜論」「地球亦行星論」「月輪田畝論」「月蝕定例論」「木星論」「地球論」「潮汛陸月論」「金星論」「火星論」「木星論」「土星論」「彗星論」など、こまかく分述されている。三集が「鳥獸略論」で、各種の獣類と鳥類との解説になり、その初めのところに「胎生類」(獸物)、「卵生類」(鳥類)のほか、「鱗介類」と「昆虫類」の図版をおいている。第三集だけに限らず、各集にわたって図版が豊富に挿入されているのが特色といえよう。

これに訓点をつけて翻刻(図版も入れる)したのは幕末の洋学センターであった「開成所」で、翻刻本の第一集には、学術語(?)のようなものにオランダ語の語音がつけてある。和刻の出版年月は記されていないが、巻末の「老皇館万屋兵四郎」出版広告には「西医略論」「内科新説」「婦嬰新説」とともに此の書も載せられていて、その最終行に「元治甲子(一八六四)秋日」と記されているから、それより以前に翻刻されたものであることは確かだ。文久年間の翻刻ともいう。私の所蔵する和刻本『博物新編』(三冊)には、各冊の第一頁に、それぞれ「橋学問所」の朱印が押してある。これは「開成所」をそんなふうにしたものか、或は一橋時代の徳川慶喜の学問所の蔵印であるのか、ハッキリしたことは知らない。

『博物新編訳解』(五冊)は慶応四年の序がある。仮名まじりで翻訳したもので、巻頭の凡例に「原文を更改せず、之をして願読せしむるを要す」とあるからそのまま和訳したもので、図版もそのまま取り入れている。訳者は「解谷(号)大森中訳」となっている。

幕末から明治のはじめに、この書が西洋で開発された理科的知識を伝えるものとして大いに歓迎されたことは、明治になつてからも翻刻本が度々増刷され、また訳解のほか「註解」とか「演義」とか「講義」、あるいは「標注」とした『博物新編』がいろいろ出版されていることと知られる。詳しくは小沢三郎『支那在留耶穌教宣教師の日本文化に及ぼせる影響』にあげている。(昭和一九年「幕末明治耶穌教研究」所収)

『談天』(一八巻、三冊)は天文学の書で、イギリスの天文学会長(凡例にいう)であった侯失勒(Herschel)の原書を、道光二七年(一八四七)から上海に来ていた英人宣教師 偉烈垂力(Alexander Wylie)が、中国人 李善蘭とともに漢文に訳したものである。私の所蔵する原本は「咸豊己未(一八五九)仲秋、墨海活字版印」とあるもので、最初に「英国侯失勒原本、英国偉烈垂力口訳、海鏡李善蘭翻述」と



あるから、全訳といえないだろうが、十八巻からなる堂々とした本だ。図版もところどころにある。梁啓超はその『西学書目表』のなかで、この書を「最も精善」と評した。これが上海で出版されて僅か二年後の文久元年（一八六一）に浪華の福田泉によって訓点翻刻（三冊）されて、やはり「談天」と題し、原本の李善蘭の序、および偉烈亜力の序を転録し次に「司天生理軒福田泉」が「浪華順天堂中」に於いて誌した「刻談天序」を載せている。よく知らないが、「司天生」というのだから、専門の天文方であったのかと思う。ただし、上海版の巻八から巻十六までを、適宜に刪定翻刻したものである。

(二)

偉烈亜力が王韜と共訳したものに『重学浅説』がある。この書は王韜の著訳を集めた『西学輯存』書目のなかにも見えるが、私はいま原本をもたない。ただ翻刻本の『重学浅説』一冊本を所蔵する。表紙裏に「咸豊八年（一八五八）四月 滬上墨海書館活版印」とあるから、この原本を訓点したものである。原本の序文はなく、訓点者の「叙」がある。それには「安政庚申（一八六〇）春」と

あるから、これも上海で原本が出版されて、二年後にはもう日本で翻刻出版しているわけで、当時の人が汲々としてこの種の知識を求めたことが知られる。内容は「力学」に関するもので、「総論」が初めと終りにあり、「桿」（槓桿）、「輪軸」、「滑車」、「斜面」、「螺旋」に分けて図を元來して説明されている。末頁に「万延元年庚申（安政庚申と同じ）六月、淀陽木村淳彦粹夫翻刊、淀陰荒井公履叔礼傍点」とし、「黄花園蔵梓」とある。大阪附近の人の訓点翻刻のようだ。なお、偉烈亜力は、明の万曆年間（一六〇三）にイタリヤ人宣教師マテオ・リッチと徐光啓が第六巻まで共訳（ラテン文から）したユークリッドの『幾何原本』を續けて、第七巻から第十五巻までを李善蘭と共訳（英文から）して完成した。マテオ・リッチ徐光啓のものと同合わせ、咸豊七年（一八五七）の偉烈亜力・李善蘭訳の第七巻から第十五巻までをいっしょにして、同治四年（一八六五）曾国藩が南京で出版させた『幾何原本』（八冊）を私は所蔵する。だがこの和刻本は出ていないから、いまこの小論考の主題をはずれる。といっても、今日われわれの用いる点、面、線、直角、銳角、鈍角、矩形、平行線、対角線、底辺、立方体、体積、比例などは、既に中国訳『幾何原本』中に見るから、多分これに倣借してきた

(三)

ものである。第一、「幾何」という明時代の中国訳語を、そのままわれわれは借用してきたわけである。理科方面の全体にわたる發軔書としては『万国公法』を著訳した丁韜良（*Maartens*）の『格物入門』（七巻）がある。この原本はもたないが、明治二年、本山漸吉の訓点本（七冊）を所蔵する。原本の同治七年（一八六八）徐継畚の序および董桐の序が、訓点本に転載されている。明治二年は一八六九年だから、原本が出た翌年には既に日本で翻刻出版されているから、この書も当時、わが国でも有用と考えられたのであろう。序によれば、丁韜良は「博通強記」で「中国に於て久しく、華言（中国語）を能くす」とい「学ぶところの西学を綜合し」、問答体にして解し易く著述したものである。訓点本は七冊になっているが、第一冊が「水学」、第二冊が「氣学」、第三冊が「火学」、第四冊が「電学」、第五冊が「力学」、第六冊が「化学」、第七冊が「算学」となり、図版がそれぞれ入っている。このうち「算学」というのは、測算計算のことで、「測量水学」「測量氣学」「測量光学」「測量力学」

の各章に分けられている。凡例によると「解りやすくして実際に役立つものとして編成した云々」と記されている。また文章は、中国人、李光祐、崔士元などが潤色したと記されている。『格物探原』三巻は「光緒二年（一八七〇）活字板印」、咸豊五年（一八五五）に上海にきた英人宣教師、韋廉臣（*Alexander Williamson*）の著述である。第一巻はやはり理科の解説書のように、「論天地」「論物質」「論地球形勢」「論空気」などのほか、「論皮相」「論骨」「論咽喉胃腸」「論骨」「論筋肉」など医学関係の記載もある。第二巻になると、「上帝惟一」「上帝至大」「上帝全能」「上帝全智全仁」と、まったくキリスト教の宣伝で、物理や博物に「上帝」をからませて説くのである。第三巻は「論元質」「論地質」「論造物為人」「論上帝理人事」などが説かれ、最後は「論死後復活」で、宗教宣伝のための「格物探原」であることがわかる。『格物探原』も明治十一年に訓点翻刻されていて、「熊野與訓点 奥野昌綱校訂」となっている。熊野與は重野成斎の序文によれば儒者だというのが、奥野昌綱は明治六年、植村正久等とともに早く洗礼をうけたキリスト教界開拓者の一人である。熊野與は首めの例言に「是の書は、天地陰陽の大より、鳥獸魚虫一卉一草の微

## R・P・ドーアとの交渉

市原亮平

### I

#### (一)

R・P・ドーアというカナダ出のイギリス人がいます。二次大戦中に戦略目的のために、つまり、戦後日本の占領・管

理目的のため少壮軍人として日本研究をはじめたらしいのです。その後イギリスの日本研究の水準を抜くにいたり、ロンドン大学の先生になり、私が十年前ロンドン・スクール(L・S・E)に通って

わたしの  
研究ノートから

#### (二)

私が霧ふかいロンドンに降り立った次の日、ドーア宅の畳と床にめぐまれた和室でスキヤキを御馳走になったことは忘れられません。次週、彼の講義をはじめてきて後、定期的に聴講し一年後に講義批判をおこなうことを約しました。

に至るまで、みなこれ上帝の創造措置に基つくを論ず、(中略) 実に人々必読の書なり」といっている。このような万物を上帝の創造措置と解釈する見方も、当時キリスト教が解禁されて間もないころ

であったし、或は儒者にも新しい、刺激的な解釈とみえたのかもしれない。「韋廉臣輯訳、李善蘭筆述」の『植物学』三冊の訓点刻本も所蔵する。「咸豊丁巳(一八五七)、墨海書館開離」と

扉裏に、原本の出版年と出版所を記しているが、和刻本としての序はなく、いつの出版かわからない。慶応三年とする書もあるというが、私のものは後刷本であろう。(文学部教授)

いたおりは、「日本の社会構造」というテーマで講義をしていましたが、いまはシェフィールド大学の日本研究センターの1中心になっています。エジプトの土地改革プランを指導したり、とにかく行動力に秀でた有数の知日派インテリの一人といっってよいでしょう。

彼のイデオロギーは多分労働党の右派あたりに親近していたので、その日本史論にもブンブンと『近代化』論の臭いがしていました。大正デモクラシー運動は「モガ」（モダン・ガール）という日本語によって浮彫にされましたが、イギリス人男女学生の做った風情の失笑が洩れました。したがって彼の日本近代化論は構造史というよりはむしろ風俗史にちかかったです。

彼は私に当時評判教授だった例のポバーの科学方法論の講義をきくよりすすめました。

私はポバーの講義がすこぶる感況で、学生の立ちん坊がいるのに一驚したのですが、講義の内容は半分はわからず、ただヘーゲル、マルクス、プラトンはげいじの敬意をいだき征矢を射ていることだけは判然としました。しかしこのヒットラー支配から逃れたユダヤ人学者は存外ユーモリストらしく、E.E.C.のことを随分引合いに出して国家の非合理性を論じており、イギリスの加盟を身をもってばばんでいるドゴールの人相を真似たのがドット学生の爆笑を買っていました。

講義後、私は雄を敗して、ポバーの研

究室の扉を排し、彼が、日本の『思想の科学』系統の市井三郎、久野収氏らによって紹介されており、『歴史主義の貧困』は邦訳によって可成の影響力をもってきたことを話したら、御氣嫌で市井、久野両氏のことを根掘り葉掘りきかれました。このことをドーアにすると彼は『思想の科学』への親近感を披瀝しました。が、すくドーアの表情はくもって、最近の『

すもので、邦訳・紹介のメリットは充分あるのですが（とくに「正系」マルクス派農業経済学者の相当部分が反帝反封建ロマンティズムの囚人となっていた当時において）、堀江英一、遠山茂樹教授の研究の一番センジにすぎないこの小論が鳴物入りで翻訳・紹介されるのは、ものがなしい日本近代化病の後遺症の一つといつてよいでしょう。

## 日本の朝鮮植民地化政策への

### 省察を欠くインテリへ痛言

思想の科学』誌が明治維新と日本の土地制度のことふれた私の小論を翻訳・紹介してくれたが、これは誤訳だらけのひどいもので、早速注文をつけておいた、とかたのでした。彼は訪日すると多分面からひっぱりダコになり、テレビで落語一席をやったりするほどの日本通、日本語通なので、『思想の科学』の誤訳、ラケには随分憤慨のていでした。彼の、日本の農地改革後の村落変化を論じた一冊の研究などは実証主義精神の発露を示

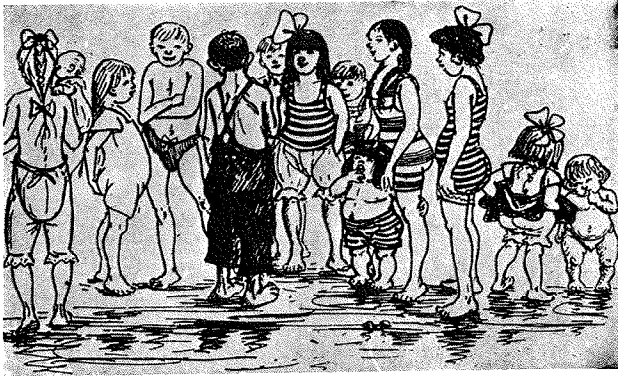
(三)

その後も何年になるでしょうか、ドーアは義財団のスポンサーで韓国でひらかれた近代化の国際会議に出席したあと日本の雑誌でわれわれを説教してくれました。いわく、日本のインテリはなぜ朝鮮語を学び朝鮮合併の歴史を研究しないのか、われわれイギリスのインテリがインド史をやりインド支配の罪をおきないを日夜しているのとくらべると無反省で

ある、と。私はドーアが日本の朝鮮植民地化にイギリスの極東戦略が相当な手伝いをした史実を知らないのか、と怪しまりました。同時にイギリスの多数派インテリが彼のいうようになって植民地支配を心魂に徹し恥じているとも思いませんでした。そうそう、私がロンドンを離れる前、ドーア宅で立教大学の神島二郎教授と鼎談したときのエピソードを思い出しました。神島氏はアイルランドでのイギリス支配の傷痕がなお残っていること、アイルランド農民の娘が半裸にちかひボロをまとっているのに驚いたことを話しました。ドーアの軒昂とした表情に何の変化も認められないので、私はダブリンで邂逅した一九二〇年代ダブリンの反英独立運動で兄と姉を英軍に射殺され、いまは酒場のアガリでその三階に養

われている老残の闘士の話をも聞きました。しかし相不変ドーアの表情は何の驚きもみせず、私は敗戦後の表情はどの驚きも洗いをうけた日本のインテリとして、イギリス・インテリのしたたかな国民意識に胸中ひそかに奔流の激するのを覚えた次第であります。

（経済学部教授）



水遊場

しとしとと際限なく降り続く雨。ポーツとかすむ水煙の中に、ほんのり灯をともし紫陽花。赤や黄の傘が流れ、エナメルの、皮の靴が濡れた路面を打つ。タイヤのきしむ音。

あなたは、君は、そしてあなたは、どうしてそんなに急ぐのか、私はこんなにも無気力で、一寸たりとも動くのが億劫なのに。なのになぜ、あなたはそんなに急ぐのか？どこへ行くつもりなのか？

欧米が何十年、いや何百年を費して、試行錯誤の果てに創造したデモクラシーを、我々は戦後一時に移入した。資本主義は日進月歩の成長をみせた。燦爛期に入った。戦後資本主義は方々で矛盾を露呈した。形だけをまねたデモクラシーは所詮紙の城でしかない。また封建社会以来の薄っぺらな道徳は、あちこちが朽ちながらも時として亡霊のごとくに姿を現わす。

価値観が急速に変換しつつある現代。自分は豪華なしかし紙製の城の中にいる。以前には予想だになかった雨が降り始める。眼前には、殺そうとして尚殺し切れない亡霊が立ち伏さがる。城は水がしみこんで軟弱になり、亡霊を撃とうと前に出れば床が破れ、逃げ出そうと後にさがれば床が抜ける。もはや、一歩たりとも動けない。

「書評」は絶対絶命の窮地の中で、もがき、苦しみ、叫び狂う、文字通り紙製のステージかもしれない。

雨はやがてあがり、濡れて軟弱になった紙は、乾燥し強固になり、歩けるようになる。その時、どこにも根をはらないデラシネである我々は、急激な価値転換の激流に押し流される。しかし、押し流されてはならない。強大な根を張らねばならない。「梅雨の季節」に、認識の世界に存在する紙製のステージの上で、もがき、苦しみ、叫び、狂って、根を張るエネルギーを得たい。

この水煙の向こうには、輝くばかりの、強烈な夏の太陽が待っている。